

2018年10月10日

土佐清水ジオパーク推進協議会

会長 泥谷 光信 様

日本ジオパーク委員会

委員長 中田 節也



第35回日本ジオパーク委員会審査結果報告書

2018年9月20日に開催された第35回日本ジオパーク委員会において、現地審査結果を踏まえて協議した結果、貴地域の日本ジオパーク認定を見送ることとしました。

その審議の過程における貴地域に関する意見をまとめて報告いたします。

【総評】

土佐清水ジオパーク構想の地域は、変動帯である日本列島の特徴を示す、付加体堆積物、地殻変動や海底生物の痕跡を残す地層、活発だったマグマ活動を示す深成岩体を有する。さらにこれらの地質を背景として海岸侵食、南海地震に伴う土地の隆起、海水準変動等の作用によって、足摺岬等の特徴的な地形が形成された。足摺岬を構成する深成岩体の成因は、海山の沈み込みなど諸説あるものの、当時のプレート境界で起こった地殻活動の痕跡であり、日本列島の成因を明らかにする上で貴重な場所である。地域内に、このような特徴を表す20カ所のジオサイトと合わせて、足摺岬のツバキ群落や竜串湾のサンゴや、段丘崖からの湧水「清水の名水」なども自然サイト及び文化サイトとして保全が進められている。加えて、サイト毎に情報を整理したカルテが作成され、サイトのモニタリング調査が組織的・継続的に実施されている。

また、2017年度の認定見送り以降、地域住民らが積極的に活動できるような場が設けられるようになり、徐々にジオパーク運営に住民が参加する環境が整えられ始めている。その一つは、観光や防災、環境保全、商工振興などの活動に関わる地域の担い手が参画したプロジェクトチームの設置である。チームでは、集落毎の郷土料理や地場産品を用いたジオ弁当の販売を通じ、ジオパークへの関心を高める活動を始めている。そのような状況の中、竜串湾の環境省ビジターセンターの新設や県足摺海洋館の改築、市とアウトドアメーカーのキャンプ場新設など、この地域の観光クラスター事業が国県市や地域とが連携して推進されており、ジオツーリズムの推進にとって好機ともいえる。

一方で、ジオツーリズムの整備及び推進は遅れており、様々な計画が確実に実施されるという確証が得られなかった。拠点施設や看板等は未整備であること、ジオパークの情報を得る施設が限られていること、観光クラスターがジオパーク事業の中でどのように機能させるか明確でないことなど、ジオパークを目指す地域としての活動実績や実現可能性、持続性が不十分である。また、多様な分野の専門家との連携を欠いているため、当地域がジオパークとして活動するための学術的価値の整理が不十分である。今一度、ジオパークの基本理念に立ち返り、推進体制の強化と計画の見直しを行い、十分な準備が必要である。

【優れている点】

太平洋に突き出した火成岩体が形成する足摺岬と、その付け根の部分に形成された奇岩様の竜串海岸、岬による黒潮反転流からの豊かな漁場が支えた宗田節産業やヤブツバキなど、特徴的な大地で営まれた人の暮らしや生態系があり、ジオパークの活動を行うのに相応しい地域であり、これらをつなげた活動も行われ始めている。

2017年度の認定見送りの後、改めてジオパークを進める仕組みを見直し、これまで土佐清水で積み上げられてきた観光や防災、環境保全、商工振興などの活動に関わるキーパーソンたちが参加したプロジェクトチームを結成された。そして、地域の食文化をジオパークの活動につなげる活動を進めるなど、地味ながら地に足が着いた活動が展開されつつある。また、プロジェクトチームなどの検討の結果、テーマを「めぐる大地と黒潮が生み出す不思議な物語」とし、活動の目的を「次の世代につなげる人づくりがジオパーク」というコンセプトで意思統一したことで、地域活動全体をジオパークでつなげられる枠組みが出来つつある。

2001年の豪雨災害後、環境省が中心になって行ってきた自然再生事業の中で、地質地形を取り込んだ環境学習が地元の小学校で10年以上も行われてきている。また、足摺岬の椿再生プロジェクト学習にはジオパークの専門員が関わり、一部の小学校では子どもガイドを展開するなど、従来からの地域学習とジオパークとの連携がみられる。さらに、小学校高学年や中学生向けのジオパーク副読本も作成され、スクールバスなどを活用した野外学習も行われている。

環境省の足摺宇和海国立公園「竜串ビジターセンター」が2019年度中に開館予定である。また老朽化した高知県の「足摺海洋館」も2020年度に整備され、土佐清水市はアウトドアメーカーとともにキャンプ場を竜串湾にオープンする計画で、ジオパークの活動はこれらの観光クラスター事業の重要な要素となり得る。将来的に、この観光クラスターのみならず、地元ガイドの拠点、半世紀の歴史があるグラスボートなどを含め、国縣市や民間、地元ガイドらとジオパークの活動を進められる枠組みに発展していく可能性がある。

【今後の課題、改善すべき点】

下記の指摘事項では、今後もジオパーク活動を継続されることを想定し、主なものを挙げる。これらに加えて、審査において指摘されたこと、今後の活動の中で地域として重要性を認識する取り組みなどを推進するように強く期待する。

- ジオパーク活動を通して、土佐清水地域の価値を明確化するためには、地質学、地理学、生態学のみならず歴史や文化、さらには景観や資源管理などに関わる専門家も参画した上で、分野を超えた関係者で価値を整理して共有する必要がある。学術研究の推進とその可視化や現地ガイドへの適用を継続的に一体として取り組めるよう、事務局と研究者の連携が必要である。具体的には、サイエンスチームの活動の再開と専門分野等の拡大が望まれる。その上で、ジオパークとして重要な土佐清水の大地の特徴を、分かりやすくかつ科学的に適切な表現でまとめる文章作りが不可欠である。
- ジオパークとしてツーリズムを推進するために、協議会は観光クラスターの設置計画や運営等に確実に参画する必要がある。特にジオパークにとって中心となる施設とされている環境省ビジターセンターのガイダンスや施設利用について、協議会の関わりが重要であり、その

機能や役割の明確化が求められる。

- 自然資源の適正利用や災害とジオパークなど、土佐清水ならではの取り組みを生かして、ジオパークの価値を高める活動を、地域住民や日本ジオパークネットワークとともに推進することを期待している。
- 価値を有する地質遺産が海域にも及ぶ可能性があること、実質的な保全活動やツーリズムは海域でも実施されていること等を踏まえ、国立公園の境界を目安として海域もジオパークエリアとすることが望ましい。
- 法的な保存の担保のない石碑等、過去の自然災害を記録した貴重な遺産の保全は、文化財保護条例等に基づく指定等を進めることが望ましい。
- 上記の指摘事項の推進において、地域住民や各種の団体との連携・協働を進める事務局の機能とその持続性は重要であるため、さらなる体制の強化と幅広い知識や経験を持つ人材等の参画が望ましい。

以上